

第28回視覚障害リハビリテーション研究発表大会 イン盛岡に向けてのプレ企画について

佐渡 一成（さど眼科）

阿部 直子（アイサポート仙台）

永井 伸幸（宮城教育大学特別支援教育講座）

小泉 大介（トラストメディカル）

村井 孝典、山口 史明（日本盲導犬協会仙台訓練センター）

吉野由美子（視覚障害リハビリテーション協会）

要旨：

視覚障害リハビリテーション（視覚リハ）に関する社会資源が不足している地域に、視覚リハの「周知の促進」「関係者間のさらなる連携」「より充実した視覚リハの実践が根付いていくこと」を目指す研究発表大会の開催にむけて、2年前から2回行った「大会プレ企画」は効果があった。

キーワード：視覚リハのリソース、地域間格差、研究発表大会のプレ企画、情報交換・意見交換の機会、多職種連携の機会

1. 目的

東北地方、とりわけ岩手県は広大な面積に比して人口が少ないこともあり、視覚障害リハビリテーション（視覚リハ）に関する社会資源が不足している（視覚リハの地域格差：西脇ら（2017））。そこで我々は、視覚リハ研究発表大会の開催によって「より充実した視覚リハが根付く」ことを願って、2年前から2019年の盛岡大会の準備を進めている。準備の一環として視覚リハの「周知の促進」「関係者間のさらなる連携」のきっかけとなるよう2回の「大会プレ企画」を実施したところ、一定の成果があったと思われたので報告する。

2. 方法

2.1. 研修会実施概要

2019年の大会を行う盛岡地域交流センターで、大会のプレ企画としての研修会を2017年と2018年に各1回行った。

2.2. 第1回研修会

実施日時：2017年11月23日（木・祝）

参加者数：54名

参加者プロフィール：当事者14名、盲学校教員9名、視能訓練士7名、眼科医6名、歩行訓練士・機器業者各3名など。会員は15名、非会員36名、不明3名であった。特に岩手県内から、盲学校教員・視覚障害当事者団体のスタッフなど15名の参加があった。

内容：「ひろげよう 視覚障害リハビリテーション～視覚リハのための地域リソースの確認と連携～」をテーマに表1の内容で実施した。



図1 基調講演の様子

2.3. 第2回研修会

実施日時：2018年7月8日（日）

参加者数：28名

参加者プロフィール：当事者6名、視能訓練士5名、盲学校教員3名、歩行訓練士・眼科医各2名などであった。

内容：日本眼科医会との共催^{*}）で社会適応訓練講習会「ロービジョン者・視覚障害者へのサポー

表1 プログラム（1回目のプレ企画）

基調講演「視覚障害リハビリテーションをひろげるために」

講師 吉野由美子

（視覚障害リハビリテーション協会会長）

活動報告「北東北での視覚障害リハビリテーションの取り組み」

報告者 及川 清隆

（岩手県視覚障害者福祉協会 理事長）

中 真也

（はら眼科 視能訓練士）

※代理報告：佐渡一成

ディスカッション「視覚障害リハビリテーションをひろげるために必要なこと・実現したいこと」

予告 第28回視覚障害リハビリテーション研究発表大会の開催に向けて

事務連絡（アンケート用紙記入のお願い など）

ト法」を開催した。講師は村上琢磨氏（NPO 法人視覚障がい者支援しろがめ代表、元東京都心身障害者福祉センター職員）ら3人の歩行訓練士に依頼した。また、講習会終了後に意見交換会を行った。



図2 講義：視覚障害者の理解



図4 シミュレーションゴーグルでの読み



図3 アイマスクでのサイン



図5 アイマスクでの食事体験とアイマスクをしたかたへの食事支援の体験



図6 行ってはいけないこと：杖を引っ張る



図7 階段昇降での介助



図8 椅子への誘導（座面を知らせる）

2.3. 分析方法

第1回は情報交換会での質疑応答の内容の分析を、第2回は参加者へのアンケート結果の分析を行った。

3. 結果

3.1. 第1回研修会

1)「視覚リハ、スマートサイト、そういう言葉を今日初めて知った（岩手）」、2)「ネットワークの作り方・意味のある続け方、役に立つ方法は？（岩手）」→「いろいろなところを巻き込みながらやっていけばよい（青森）」「垣根を取っ払うことから…（福島）」、3)「盲学校に在籍している子どもの最新の視機能データをどう入手したら良いか（岩手）」→「盲学校での学校保健検診を利用して児童・生徒それぞれの主治医に検査の結果を文書で送付（回答）してもらうシステムを始めたところ（宮城）」、4)「視覚障害者の自立には白杖などを活用しての単独歩行（単独での移動）が重要だが、同行援護が増えると自立に悪影響はないか（福島）」→「同行援護には制度とニーズのミスマッチがある（岩手）」「支援サービスがあるのは良い反面、本人が力をつけて自立していく可能性を潰してしまう危険性もある。（東京）」などのように、個々の参加者が「知らなかった」ことを質問し、情報を持っている参加者が答えるという情報交換が行われた。

3.2. 第2回研修会

1) 社会適応訓練講習会については「視覚障害疑似体験と誘導実習が実際にできて良かった」など、「とても良かった」が90.9%（10/11）であった。2) 意見交換会については「当事者の質問で理解が深まった」「いろいろな立場の意見を聞くことができた」など、「とても良かった」が60.0%（6/10）であった。さらに3) 盛岡大会で取り上げてほしいことは「スマートサイト」「最新のロービジョンエイド」「神戸ビジョンセンター」などであった。

4. 考察

4.1. 研修会への協力・周知・参加依頼

1回目の研修会への協力と周知・参加依頼のために岩手県の視覚障害者支援施設を訪問したものの、応対した方の反応が消極的であったため、定員50名に対しどの程度集まるか不安だった。視覚リハ協会そのものについての情報を得

ていないことも消極的な反応の要因の1つではないかと思われたため、宮城県の仲間に依頼して、同じ職種というネットワークから本研修会の趣旨や目的を説明してもらったことが定員を超える参加者数につながったと思われた。研修会終了後に設けた自由な交流時間には、地域内のリソースの情報交換を積極的におこなう様子がみられた。

4.2. 情報交換・意見交換

2回のプレ企画ともに、今後地域の視覚リハの核となるであろう人たちを中心とした情報交換・意見交換の機会をより多く設けるようにしたことで、2019年の研究発表大会のプログラムに関するだけでなく、今後の視覚リハに対する抱負や課題意識などをざくばらんに意見交換することができた。

4.3. プレ企画の効果

これら2回のプレ企画の取り組みは、視覚リハの「周知の促進」「関係者間の連携構築」に有効であり、会員の少ない地域での研究発表大会

の開催を実現していくためにも活用できる手法の1つと思われた。

稿を終えるにあたり

多くの発表と活発な討論が地域の視覚リハを育てますので、2019年7月26日（金）～28日（日）は岩手県盛岡市で開催する第28回視覚障害リハビリテーション研究発表大会の会場でお待ちしています。

謝辞

2回目のプレ企画開催に際して、日本眼科医学会の社会適応訓練講習会としての助成を受けた。ここに記し、謝意を表する。

文献

- 1) 西脇友紀・仲泊聡・清水朋美・林知茂（2017）ロービジョン支援ホームページ更新調査報告．視覚リハビリテーション研究，6(1)，10-13.